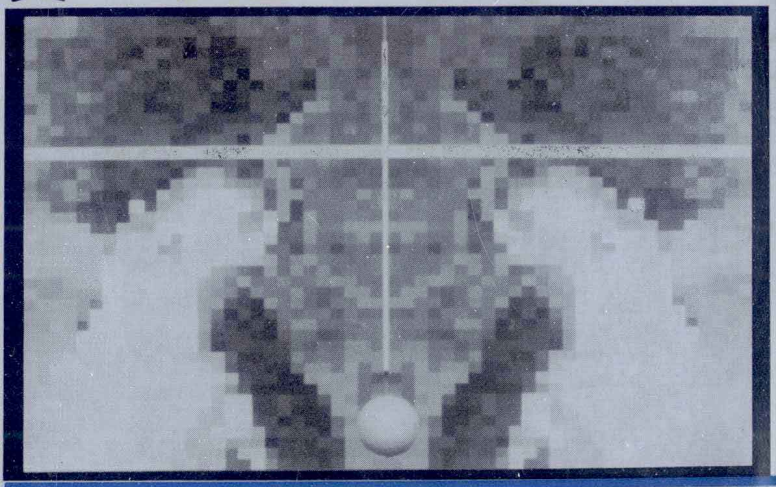
BRUCE STERLING
ELLEN DATLOW
WILLIAM GIBSON
CHARLES PLATT
STEVE BROWN
JOHN SHIRLEY
ROB HARDIN
LEWIS SHINER
DAVID HARTWELL
SAMUEL DELANY
LARRY McCAFFERY

TAKAYUKI TATSUMI
巽 孝之

CYBERPUNK AMERICA

サイバーパンク・アメリカ



[redacted]

サイバーパンク・アメリカ

CYBERPUNK AMERICA

巽 孝之

CYBERPUNK AMERICA

勁草書房

著者紹介

巽 孝之（たつみ たかゆき）

1955年東京生まれ。

上智大学大学院博士課程修了、コーネル大学英文学博士（Ph. D.）。

19世紀アメリカ文学専攻。

現在、慶応義塾大学講師、ＳＦ批評家、アメリカのＳＦ評論誌＜ＳＦアイ＞編集委員。

共著に『悪夢としてのＰ・Ｋ・ディック』（サンリオ）、『文学する若きアメリカ── ポウ、ホーソン、メルヴィル』（南雲堂）など。

サイバーパンク・アメリカ　KEISO BOOKS④

1988年12月20日　第１版第１刷発行

© 著者 巽（たつみ） 孝之（たかゆき）

発行者 石橋雄二

発行所 株式会社 勁草書房（けいそうしょぼう）

112 東京都文京区後楽 2-23-15 振替／東京 5-175253

電話 03-814-6861（営業），03-815-5277（編集）

＊落丁本・乱丁本はお取替いたします。　三栄印刷・和田製本

＊定価はカバーに表示してあります。

＊無断で本書の全部又は一部の複写・複製を禁じます。

ISBN4-326-09824-4

CYBERPUNK AMERICA

はじめに

本書は、一九八〇年代のアメリカSF界に忽然と登場したひとつの「運動」に関する評伝である。したがって、五人の作家と三人の編集者、及び各一名の学者・批評家・音楽家から成る群像のうち、必ずしも中心人物は設定されていない。むしろ彼らは全員「サイバーパンク」というドラマの登場人物として、ひとまず紹介されるだろう。

さもなければ、本書はあたかもサイバーパンクを主人公とするビルドゥングス・ロマンの風貌を垣間見せるかもしれない。そう、この名で呼ばれる「運動」はやがて「現象」としてSF内外を席巻し、SFジャンルに接続しつつも切断された新たなるサブジャンルを実現した。そればかりか、やがて小説どころか映画・演劇・美術・音楽の枠を超え、新たなるサブカルチャーさえ確立するに至る。ほとんど「成長物語」にもたとえられる歴史。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.erton

もちろんこれは、「サイバーパンク」という記号が発明された刹那、八〇年代においてすでに同時多発的に進行していた諸領域の実験が、最も要領を得たかたちで一挙に発見されてしまった事実に等しい。つまり、こう要約できよう。SFがサイバーパンクを創造したというよりも、SFではサイバーパンク小説という実験が試みられていたのだ、と。

SFと同時代環境にまつわるこのようにいささか逆説的な関係について、本書は多くの証言を集成しながら、やがてひとつのフィールドワークを完結させることになる。

ありがたいことに、この現象は薄れはじめていて、
想い出話になりつつある。

——ギブスン「ガーンズバック連続体」

サイバーパンク・アメリカ

目次

はじめに

序　サイバーパンク・グラフィティ　1
1　おれたちはポップ・スターだ！——ブルース・スターリング*　37
2　ある女王の伝説——エレン・ダトロウ　73
3　サイバーパンクと呼ばないで——ウィリアム・ギブスン*　87
4　ポスト・ニューウェーヴの岸辺に——チャールズ・プラット　121
5　鏡眼鏡綺譚——スティーヴ・ブラウン　133
6　ミラーシェードの洗者ヨハネ——ジョン・シャーリイ*　147
7　メガロポリスは、黄昏——ロブ・ハーディン　181

8　あなたもアメリカSFが書ける——ルイス・シャイナー　193
9　黄金時代よ永遠に——デイヴィッド・ハートウェル　205
10　サイボーグ・フェミニズム宣言——サミュエル・ディレイニー*　217
11　世紀末効果——ラリイ・マキャフリイ　255
あとがき　270
サイバーパンク年表
ビブリオグラフィ
インデックス
初出一覧

*印のものは各章末に作家へのインタヴューを収録。

序 サイバーパンク・グラフィティ
Cyberpunk Graffiti

"Johnny Mnemonic" illustrated by Jun Suemi

试读结束，需要全本PDF请购买 www.erton

何かが起こりはじめている――アメリカSF界をこんな予感が貫いたのは、いったいいつのことだったか。そのうごめきをぼくたちが感知したのは、いったいいつのことだったか。いまはもう、時間を特定することさえ無益な努力となりかねない。

もちろん、アメリカSFはこれまでにもさまざまな予感を孕んできた。

ヒューゴー・ガーンズバックによって科学小説（サイエンス・フィクション）ジャンルが宣言された二〇年代――「未来予測の時代」。

ジョン・W・キャンベルの演出した三〇～四〇年代――「外挿法（エクストラポレーション）の時代」。

アルフレッド・ベスターに象徴された五〇年代――「黄金時代」。

サミュエル・R・ディレイニーがSFすなわち思弁小説（スペキュラティヴ・フィクション）としてずらす計略を思弁した六〇年代――「内宇宙（インナースペース）の時代」。

そして、ジェイムズ・ティプトリー・ジュニアが人生そのものを賭けて探究した七〇年代――「性差解体（ジェンダー）の時代」。

それらはいずれも、何かが起こることによってのみ認知されてきた時代性だろう。

そして、八〇年代。

この時代のSFにおいても、いま確実に何かが起こった。そしてそのゆくえは、なお予断を許していない。というのも――何かが起こって何かが終わるのか、もしくは何かが終わって、何かが起こるのか――それは、誰にも推断できないからだ。

ぼくたちに許されているのは、すでに蒔かれてしまった胸さわぎの種子を発見しなおすことにつきる。その種が蒔かれていなかったらどういう顛末になっていたかを想像してみることにつきる。

あの時、あの場所で。何かが、誰かを。

一、デンバー一九八一年

――ギブスンとスターリング

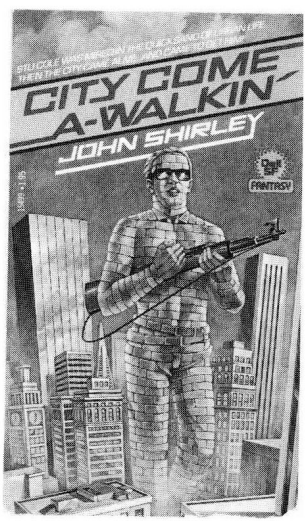
一九八一年夏、コロラド。

ロッキー山脈の高峰をのぞむ州都デンバーを舞台に、世界ＳＦ大会（コンヴェンション）「デンベンション」が開催された。ウィリアム・ギブスンは回想する――「あのときのパネルで、誰よりも意気盛んだったのは司会のガードナー・ドゾワだった。彼は、新しいＳＦ運動が起こるのを切望していたんだ。」

パネルというのは「パンク・ネビュラの彼方」と題されるシロモノ、ドゾワはのちに『年間ＳＦ傑作選』や〈アイザック・アジモ

フズSFマガジン〉の編集者となり「サイバーパンク」誕生のヘソの緒を切る中堅SF作家・評論家。パネルの名には、もちろん毎春アメリカSF作家協会が選ぶ最優秀作品賞「ネビュラ賞」がひっかけられているのだが、それはこの前年八〇年に若手作家ジョン・シャーリイの『シティがやってくる』やブルース・スターリングの『アーティフィシャル・キッド』といったパンクふう長編が出て話題になったあたりに、多分に戦略的なドゾワが鋭く注目したためと思われる。

そう、いま読みかえしてみると、これら二作には現在一般的なサイバーパンク・イディオムがすでに少なからず胚胎していた。ギブスン永遠のヒロイン・モリイをひときわ印象



ジョン・シャーリイ『シティがやってくる』

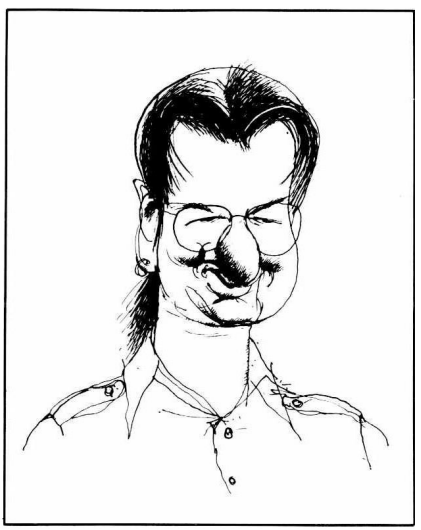
づける〈眼窩埋め込み式ミラーシェード〉はすでに『シティがやってくる』の主人公シティ（サンフランシスコの擬人化）が装っているし、もうひとりのヒロイン・アンジェラ演じるところの擬験（シムスティム）女優の役柄はすでに『アーティフィシャル・キッド』のクローン・ヴィデオスター〈アーティ〉にその萌芽が見られたものだ。

ただし、ここでデンベンションの日付にもういちど気を留めていただきたいのだが、八一年といえばギブスン自身はまだ「記憶屋ジョニイ」を含む短編を四つほど発表していたにすぎず、いわばまったくの新人だった。シャーリイやスターリングは彼よりずいぶん年下ながら、すでに複数の長編を持つ先輩作

ウィリアム・ギブスン（by Richard Thompson）

家だったのである。スターリング処女長編『退縮海』（インヴォリューション・オーシャン）を偶然読んだギブスンは、こう述懐する。「この男は――エリスンにいわせれば〝坊や〟だが――すでに一冊書いてしまっているし、それがかなりいい。じっさい、どことなく新鮮ですらある。だからぼくだって――。」

このときの立場にしても、パネリストには新進気鋭のスターリングのほか、今日では『13日の金曜日』ノヴェライゼーション（八七年。邦訳・創元推理文庫）で知られるパンク／バイク作家ニコラス・ヤーマコフ（筆名サイモン・ホーク）らが含まれていたが、無名に近いギブスンのほうは、フロアを埋める一視聴者にすぎない。彼はだからこそ、この



ブルース・スターリング（by Richard Thompson）

年下の先人たちに熱いまなざしを送り続けた。

やがて、パネル自体はSFよりも音楽の話に集中していく。しかしドゾワは「いたずらっぽい眼」を輝かせながら、戦略のポイントだけは外さない――「どうだい、これだけSF作家のパンク・ファンがいるんだから何か運動でも起こせるんじゃないかね？」

だが、そのときのスターリングには「まさか将来こんなことになるなんて」予想もつかず、むしろ彼の熱弁がクライマックスに達したのは、デヴィッド・ボウイの「ダイヤモンドの犬」の歌詞をすらすら暗唱してみせた瞬間だった。これがギブスンの心を一挙に捉えてしまう。というのも、彼自身、大のボウイ・ファンなのだ。やがてデビュー作にして出世作となる『ニューロマンサー』（八四年）には、ボウイをモデルにしたホログラフィック・アーティスト（ピエール・リヴィエラ）さえ登場させているほどなのだから。

「おいおい、こいつらについてけば、おもしろいかもしれないぞ」――前年にはニューヨークでシャーリイと、そしてこの年にはスターリングと初対面をとげたギブスンは、急速に密度を増す友人関係の中に、鋭く「運動」の萌芽を見抜いたものだった。

ちなみに同大会ではギブスン初の朗読会が計画されており、そこでは逆にスターリング夫妻が聴衆となって、彼がちょうど書きあげたばかりのタイプ原稿「クローム襲撃」を朗読する一幕もあったことは付け加えておいて

试读结束，需要全本PDF请购买 www.erton